



文化彩る若者たち

小さなポーチからポストンバッグまで、田郷岡直美さんが作るバッグはどれも「和」の雰囲気をもとにしている。
自宅の一室にある工房で自らデザインを練って、型紙を作り、裁断、縫製を行う。その工程の一つ一つに彼女の中にある「日本」が映し出される。「海外の生地を選んで、どこか藍染めに似ていたり、友禅のような柄だったり。知

バッグ・小物制作



正絹の古い帯をリメイクし、牛革と組み合わせたバッグや財布。あてやかで高級感のあるデザインは和装にも合う

にすることが多いため、メールによる注文のやりとりは英語。為替の動きも気になる。苦勞は絶えないが、その分やりがいも大きい。

田郷岡さんは今、秋田から世界へ手作りバッグを送り出している。発表の舞台は各国の作家が出席するインターネットサイト「etsy(エッツィ)」。米国、ヨーロッパ、シンガポール。彼女の元には国境を越えて注文が舞い込む。手作りのきめ細やかさ、そして「日本的」であることが評価されているようだ。日本よりも海外のお客さんを相手に

2011-05-19 秋田魁新報掲載

「和」の心 世界へ発信

田郷岡 直美さん(39) 秋田市

る作品を提出しないようにした。日本人だからこそ日本に頼りたくない、距離を置きたいと思った。ところが、海外の人の反応は違った。現地のマーケットに日本の古布や和紙を使った小物を出品すると、よく売れた。確かな手応えを感じ、うれしかった。「自分の中にある日本的なものを、あえて見ないようにしてきた。でも日本にこだわっていいのかもしれない」。留学生活で、そう気付かされた。

「必要なバッグはその人の生活スタイルや環境によって導くので、デザインはもちろん、手にした時の感触はどうか、どんな時に使うのかをじっくり聞きます。誰よりも、使ってもらえる人を大切にしたい」。そうして世界中に自分の手作りバッグを届けた。秋田から「和」の心を伝えたい。日本を飛び出し、世界と触れ合ってみつけた生き方だ。

(三浦美和子)

自分は何がやりたいのか。浮かんだ答えは「ものをつくり出す」ということだった。考えた末、退職し帰郷。25歳だった1996年、秋田公立美術工芸短大に社会人入学し、産業デザインを学んだ。卒業後はデザインをより深く勉強しようと、オーストラリアのシドニーへ留学した。海外で学ぼうとしたのは西洋のデザイン。洋風なものに漠然と憧れていた。美術系の大学で学び、課題制作では「日本」を感じさせ

たこうおか・なおみ 71年、秋田市生まれ。秋田公立美術工芸短大を卒業後、01年にオーストラリアに留学。スウィンバーン大でコミュニケーションデザインを学ぶ。06年に帰国し、同市新居の自宅で手作りバッグのネット販売を始める。自宅の工房は ☎018・8228・4650。ホームページは <http://www.tagodesign.com>

